

Book Review

口腔病原体が誘う 死のスパイラル

山田 毅 著



Reviewer

大原直也 Naoya Ohara

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔微生物学分野教授)

A5判, 240頁
定価 3,570円
(本体 3,400円+税 5%)
医歯薬出版刊



本書は、歯学部微生物学の教授として約10年間にわたり教鞭をとった研究者による書であり、口腔微生物学に関する最新の情報がまとめられている。著者は、医学部卒業後、外科医として出発し、細菌の薬剤耐性メカニズムの解明をきっかけに基礎研究の道に入った国際的に認められた研究者で、*Nature* 誌をはじめ、一流誌に多くの論文を発表している。長崎大学歯学部の名物教授として定年を迎えてから、すでに10年以上が過ぎているが、2005年には『病原体とヒトのバトル』（医歯薬出版）を上梓し、本書はその姉妹編にあたる。

本書では、口腔病原体が隠れたところでヒトの命を脅かしている事実とその謎が、著者の独特のセンスと手法により解き明かされていく。定年退官後に臨床現場で患者を診察しながら完成した結論であり、著者ならではの人生の集大成ともいべき傑作である。コンパクトながら、基本的な細菌学や免疫学の内容を網羅しており、新たな知

見も多く交え、論文を引用しつつ科学的根拠に基づいた説明がされている。

“はじめに”の中で「歯科医師と医師のために書いた」と記されているとおり、臨床に携わる先生方には基礎医学の復習と最近の流れを知る読み物としてお薦めする。さらに、医療に携わるすべての方に十分に参考となる書である。

「口腔の常在細菌が起す歯周病や虫歯も実は糖尿病や高血圧症を起し、増悪させている。これが、癌や脳梗塞を起す原因になる。まるで、刺客のように暗躍しているのだ」と始まる。歯科関係者なら、歯周病と糖尿病の関連性、口腔細菌と誤嚥性肺炎や感染性心内膜炎との関連などは周知の事柄かもしれない。著者が、口腔常在細菌が刺客になると言い切ったその理由として、その後に壮大な物語が用意されている。

口腔病原体が誘う負の連鎖について、迎え討つヒトの防御反応と、口腔病原体の戦略・戦術が詳細に語られ

る。しかし、口腔細菌は単に悪者ということではなく、共存することの重要性についても説いている。バランスの問題であり、「バトルでよい勝負ができれば、病原体はヒトと共生する。口腔の清掃で維持される健全な口腔環境は、病原体群にも快適な社会である。病原体は、持ちつ持たれつ関係を維持しながら、宿主に住みつこうとする。免疫が低下し、利用価値がなくなると死に誘うのだ」と論じており、口腔ケアの重要性と医療従事者への注意喚起を提言している。

著者は、読者に対して『病原体とヒトのバトル』が人間社会のバトルに類似している面白さを感じ、自分が病原体になった、あるいは免疫系になった気持ちで、自分の人生とダブらせて読み進めてほしいとも述べている。文章には粗造りなところがあり、読み難い点があることは否めないが、それにも増して著者の人柄と執筆に対する熱意が如実に滲み出ており、その味をじっくりと味わうことができる。